

今号の内容

- | | |
|--------------------|-------|
| ◆柳川の夏 節電の夏 | 2~7 |
| ◆7月は同和問題啓発強調月間 | 8~9 |
| ◆各種医療制度のお知らせ | 10~11 |
| ◆情報公開と個人情報保護 | 12~13 |
| ◆学校の小規模化への対応方針決定ほか | 14~15 |
| ◆よかばんも～体験参加者募集ほか | 15 |
- ◆市民のひろば(16-17) ◆川柳(17) ◆図書館・水の郷ニュース、柳川百選まち歩き(18-19) ◆情報わいど(20-28) ◆がんばったね・ぬくもり(28) ◆もちふみデビュー(29) ◆保健ガイド(30-31) ◆新市史抄片(32)



みんな泥んこ たんぼでドッジボール

矢留小学校の5年生の児童50人が6月18日、学校近くの稲の実習田で代かきを体験しました。代かきは田植え前に、田んぼの土を水と一緒にかき混ぜ、土を柔らかくし苗を植えやすくする作業。普通はトラクターでしますが、同校では児童が田んぼを走り回って行のが伝統になっています。田んぼに入った児童は、まず端から端まで走って往復。その後、2チームに分かれてドッジボールをしました。自分から田んぼに倒れ込む児童もいて、歓声を上げながら泥の感触を楽しんでいました。12年間にわたって実習田を提供している黒田富美美さん(吉富町)は、「毎年、子どもたちの笑顔を見るのが楽しみです」と目を細めていました。

新 市史抄片

江上・八院合戦

88

■ 問い合わせ
市生涯学習課市史編さん係 ☎72・1275



戦死した立花鎮実・親雄の墓(大木町)

慶長5(1600)年、主戦場である関ヶ原での西軍敗戦により、柳川へ下った立花宗茂は、今度は東軍の黒田氏・加藤氏と、西軍から東軍へ寝返った鍋島氏と対峙することになります。このうち、鍋島氏とは実際に戦端が開かれました。これがいわゆる江上・八院合戦です。蒲池城を預かっていた小野和泉鎮幸が、合戦後ほどなく記したとされる覚え書

きがあり、これに基づいて合戦の様子を見ていきます。

筑後川を渡り江上(現大川市、久留米市城島町)付近まで進んだ鍋島勢との間で、同年10月19日に小競り合いが行われましたが、日没により、その日は撤兵させています。その夜に鎮幸を中心に開かれた軍議では、東軍の加藤清正や徳川氏へ行っていった和平交渉の知らせを待つて、戦闘を開始することに決しました。

しかし、翌20日の日の出に鎮幸はおびただしい鉄砲の音に気付きます。鎮幸が事情を確認すると、立花勢の安東五郎右衛門・石松安兵衛・千手六之丞が敵勢と戦闘状態でした。一度は敵勢を打ち崩しながらも、軍勢を立て直した鍋島勢によって安東・石松は討ち死にしています。

立花鎮実・親雄父子は、敵勢12備のうち9備まで打ち崩しましたが、味方の支援がなく、敵中に孤立してしまいました。鎮幸は鎮実・親雄父子に支援があれば、あるいはこの合戦に勝っていたかもしれないと述懐しています。そのほか、立花三太夫・新田平右衛門ら多くの有力武将をこの合戦で失います。

鎮幸自身も敵中に分け入って奮戦しましたが、敵勢に囲まれ、ついに討ち死にを覚悟します。ここで、鎮幸の家臣大原市内が自ら申し出て、身代わりとなるべく鎮幸の鎧を着て、馬に乗り、敵勢の中に駆け入ります。大原市内は討ち死にしていますが、敵勢がひるんだ隙に鎮幸は蒲池城に退くことができました。鎮幸は、左の乳の下を鉄砲で撃ち抜かれ、さらに脛にも傷を負っていたため、蒲池城に入るまでの間に三度ほど気を失いそうになり、家臣らの介添えでようやく城に退くことができました。この合戦の数日後に、加藤清正の勧告により、宗茂は柳川城を開城します。

現在も大木町や久留米市城島町付近には、この江上・八院合戦の激戦を物語る戦跡が残っています。

市史編さん係 白石直樹

人のうごき

平成24年5月末現在

- 人口 71,171人(前月比-32)
- 男 33,741人(-4)
- 女 37,430人(-28)
- 出生 51人、死亡 71人
- 転入 124人、転出 136人
- 世帯数 24,740世帯(+14)

●台風4号が四国と本州を縦断。暴風雨の中、ヘルメットにカッパ姿のアナウンサーがテレビ中継をしていた。自らを風雨にさらすことで、台風の威力を伝えたかったのだろう。しかし台風が接近したら外出を控えるのが鉄則だ。視聴者に誤解を与えないよう自重することも大切では。

●小学2年生の息子が地域のソフトボールの練習に参加するようになった。自分が幼少のころはなぜ練習しているのだと不思議ながら参加していたが、息子は楽しんでいる。ボールを真つすく投げられなかったが少し様になってきた。あとはハッティングの大根切りを直してあげないと。(賢治)

●ユーロとワールドカップ最終予選が始まった。スポーツ観戦が好きで私にとって見逃せない試合が続いている。仕事から帰宅し、録画していた試合を見ようとリビングにいくと、そこには母の姿。韓ドラを見ると言い張りテレビを譲らない。絶対に負けれない戦いが始まった。(和久)

編集後記